

目的： 女性の社会進出の増加に伴い、社会情勢特に家庭に様々な影響が現れている。食生活においては、健康意識の高揚、食品の多様化、新食品材料の開発、外食産業の発達などが起因となり大きく変わりつつある。人間は時の流れの中で母から子へ、子から孫への伝承を繰り返し古代からの食生活を支えて来たのである。従って食文化の伝承は人間の貴重な文化遺産として受け止めるべきである。そこで家庭における食の伝承をテーマとして実態を調査し、将来、食の管理者を目指している学生の指導資料とすることを目的に、今回は年中行事の内のお正月料理を中心に調査し、その結果を分析し報告する。

方法： 調査対象は、私立女子大学および短期大学1年次生で、将来食生活管理者を目指している者200人とその母親で合計400人とした。調査期間は1989年12月～1990年1月とし、調査用紙を配布し自記式解答により調査した（回収率87％）。

結果： 調査対象となった母親の平均年齢は、 $46.9 \pm 4.1$ であった。64.3％が有職者で、内55.2％（常勤の勤務29％、自営業26.2％）が常勤者であった。家族形態は72.4％が核家族であり、平均家族数は4.5人、平均子供数は2.2人であった。母親の食生活意識とお正月料理との関係について、林式数量化Ⅲ類を用いて分析したところ、母親の食生活意識が健康志向、教育志向、情報活用志向の強い場合、数の子にはじまる伝統的おせち料理を準備する傾向が認められた。雑煮はいずれの場合も圧倒的多数が祝膳に供していた。さらに食品を選択する時の各種表示に対する関心度を母娘で比較したところ、製造年月日に関して93％、90.5％といずれも高い数値を示したものの、全般的に娘の方が関心度は低かった。